

… 雨でも休まず；第120、121回 …

「若柳・嵐山の森」から

- 活動1：森林作業に注力：12月6日(第一土曜日)、参加費300円
 - 弁当持参。
- 活動2：里山交流の活動：12月21日(第三曜日) 参加費500円
 - 弁当は主食(飯かパン)だけ持ってくる事、自分の食器(箸・皿・お椀)も持参。
 - * 活動1・2とも「ボランティア保険加入」ため、申込必要
TEL&FAX 03-3411-1636／事務局まで。
- 臨時；簡易製材機デモ；12月18日(第三曜日) 参加無料、弁当持参。
 - * 神奈川県林業協会主催／午前：間伐実技、午後：製材機デモ。
- 初参加者：相模湖駅前：9時15分まで待つ。8時42分、9時02分 JR高尾発。
- 服装；汚れても良い格好・着替え 足元が滑らない履物
- 持参品；軍手、自分の食器(箸・皿・お椀)持参、万一の怪我に備えて…保険証写し
そして、作業を楽しむ“ゆとり”と怪我をしない「心構え」

森林を生かす工夫

- 神奈川県では2005年から「水源環境の保全・再生」に長期(20年計画)・大規模(約1100㌶/年)で取り組む計画で2001年より学者や都市有識者による意見書の提出を求めた。この答申書で気になることが2点ある。森林の基本データ／「森林簿」が不正確なまま、個人の財産である私有林の公的管理を進めようとしている事。もう一点、「森をいかす対策」に殆ど言及されていない事である。
- 輸入材が入って来る事で国産材が売れず森に手が入れられなくなり森は、荒れる一方で林業関係の雑誌でも「林業は立ち行かなくなった。税の投入でこれを維持する。森林は、環境省の管轄」と言う論調が多くなっている。
- 本当にそうか。第二次大戦後の経済復興への道を猛追して森に経済性が低いからと森を生かす努力をしないで税の投入に走ってもの良いか。森林は本来、人間と調和・共生する大切な存在なのに…。
- 我々が森に入るようになってこの課題にも取組み、今では森林に事業の可能性を見出しかかっている。森を諦める論調は、森を知らない学者や評論家の言だ。

活動報告 1 : 森林作業／第一土曜日（11月1日）

- ・家を出る時は、小雨模様だったが、森に入る頃は、初冬の穏やかな快晴。22人の参加。

- ・午後は、FSC説明会だから基地から近い、広葉樹林・針葉樹林の分岐三叉路の「協力協約C地区裾地」に入る事にした。
- ・そこは、下から見上げると尾根に向けて三角形に森林が広がる。ここは足場も良く5台のチェンソーが効率よく稼働して見る見る視界が広がり、作業終了後の見上げる森は、美しく

変身した。はや、この1日で間伐作業に見通しがついたから来月は、枝打ちに入る。



富村FSC審査員を講師に「FSC説明会」を開催した。

報 告 : F S C 説 明 会 : 於／桂北公民館

- ・FSC認証5ヶ年計画の3年目を終え活動の節目に来たから、FSCの意義・内容と我々の活動の意味を徹底するため、講師に富村周平認証審査員と前沢英士WWF指導員を迎えて説明会を開催した。お客様に溝口相模湖町長、行政センターと相模湖町林務、他の自然保護団体など29名。
 - ・富村講師の話しあは、FSC10の原則・56の細則の簡潔明瞭な説明とわが国の森林の抱える問題点の指摘。その指摘とは、植林はしたが手入れをしない木は、瘦せて使い物にならなくなる危惧。また、再造林する仕組みがなければ老木ばかりになるが、その先はどうなるか。世界の森林が激減する中、輸入材が入って来なくなる時の備えは、考えているか。
 - ・前沢講師は、13ヶ所・17万haのわが国の認証を受けた取得団体ごとの森の傾向と認証を受けた材の流通が未発達の現状をどう解決すれば良いかと問題提起。
- ・休憩を挟んで当会のFSC・FCC活動の各事業班の現状説明と方向を報告した。
- ・オブザーバーとして参加した認証機関SGCの佐々木さんを含む富村周平さんの当会の活動に対するアドバイスは、以下の通り。

- 1)、森林現場の多様で活発な活動を評価するが既に、法人として行動しているのだから「森林の経営マネジメント」に取り組まねばならない。即ち、「Plan-Do-Check-Action」と言う施業計画を立て、その計画・目標に沿ってどのような森つくりをするかを明確にすべきだ。例えば、「ふれあいの森」と言う事であればどのような“ふれあい”にするか、「学習の森」と言う事であれば、どの様な“学習”をするのか、これらの目標を立てれば更に、内容のある活動になる。
- 2)、市民参加の「森林ボランティア活動」に“森林の癒し”と言う意味も大切だが、この会の現状から「法人事業としての管理レベルと技術の向上」を検討しなければならない状況に来ている。

活動報告 2 : 里山交流／第三日曜日（11月16日）

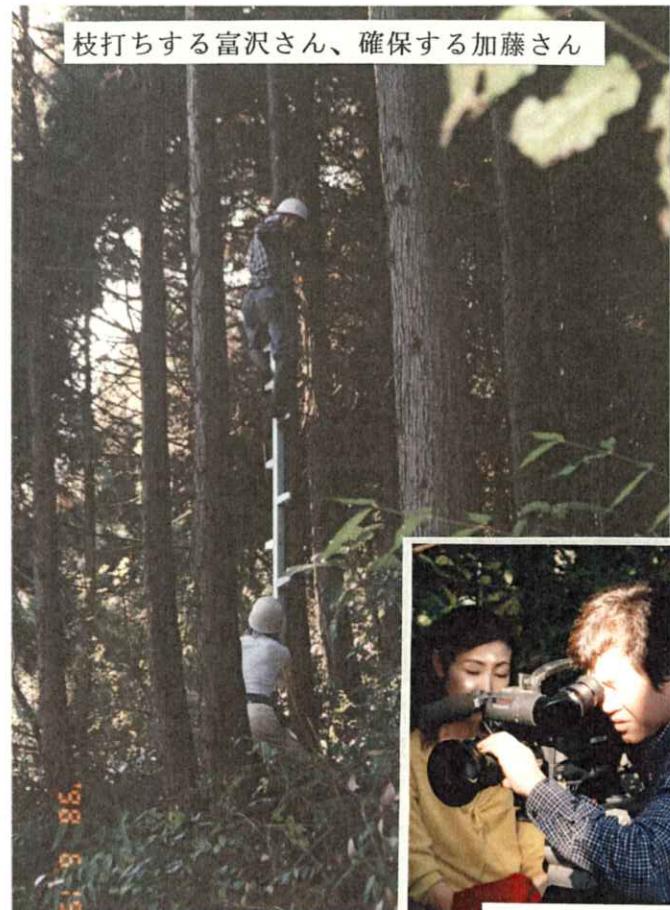
曇り後、雨模様の予報が完全に外れて霞みのかかる晴れから快晴になった森に63人が集まった。

家族連れが3組で子供の声が森に響いて平和な雰囲気は嬉しい。今月の、特別メニューは「流域材住宅用の大径木伐採」

• FCC活動の一環として相模川 流域材を使って「流域材活用」をするため甲斐東部材成型組合と組んで進めていた計画に資金の見通しが立ったので実施する事にした。本格的な大径木の伐倒は未知の分野。研修を含めて北都留市森林組合の望月さんと甲斐東部の和智さんにお願いした。

• もう一つは、NHK-TVが11月22日の朝、8時からの「おはよう日本：森・湖・旅」の番組で放映するための撮影。午前中は、協力協約B地区の枝打ち作業現場までの急登の森林を器材を担いでの6名のNHK撮影班は、大汗をかいた。枝打ちは、富沢さんと加藤さんが“カッコ良く”決めてくれた。白石さんの“藪刈り”も映像になった。

- お昼、和氣藪々の昼食風景と須藤仲間、伊藤小夜子仲間にインタビューをしていた。
- 午後、本物樵（北都留森林組合職員；40歳位）／望月さんに大径木の伐倒の技術を全員で見学させて貰う事にした。望月さんは、高さ優に30mもあるかと思う杉の大木を狙ったところ寸分違わず倒して見せてくれた。そのバリバリ・ズシンと轟音を立てて倒れる大木の迫力に見学の森仲間は一瞬、静まりかえった後、大きな拍手がわき起ったが、ベーブルースが「あそこにホームランを打ち込むぞ」と予告してその通りにしたと同じ位の技に見えた。二本目は、わざと掛け木（横の木にひっ掛かる）させて、それをチルホールドという引っ張り機で引き落とす技を見せてくれた。NKKの撮影技師が倒れる木の姿を直近で撮影したいと無謀と思う要求を出したが望月さんは、「掛け木」させるからOKだと言った。NHKに命知らずがいる事を確認した。この技術は、高圧電線などがあってどうしても失敗を許されぬ場合などに使われるとの事。先ず、高さ8mばかりの所にワイヤーをかける。器具を使ってだが望月さんがアッと言う間に、正しく猿（ましら）のごとく木に登ったのに皆んな唖然となってしまった。伐倒に入る前、倒す方向を確認するために「またくら覗き」の最新式？の伐倒方向／確認法を見てくれた。チェンソーを入れた木は、それこそ寸分違わず真下の撮影技師を目掛けて倒れ込んで“アッ”と思ったが実に見事に隣の木にひっ掛かった。それも余りにも自然なので技の凄さを感じないほどだった。名人程、無理や無駄を感じさせないと言うが、全く自然に無理なく作業は完了した。こんな事は、後から感動がついて来る。
- 森林が荒れるに従って、この様な技術が廃れて行くのが恐ろしい。作業終了後、森の中で園田隊長がインタビューを受けていた。市民の森林参加がテーマのため伐倒技術は、プロの技のせいか残念な事に放映されなかった。



枝打ちする富沢さん、確保する加藤さん



NHK撮影技師

・執行部：幸良告、作業後16時～、於／交流センター

第三定例活動日の終了後、午後4時から事務局執行部では、活動の方針や重要課題などを討議。FSC活動検討のために篠田さんにも参加願った。

1、森をつくる／FSC活動：

- 1) FSCに向けて活動内容を強化する… その方法として各班の活動内容の意義の確認と会との位置関係を確認・検討する。
 - 2) FSC推進部会を立ち上げる。
 - 3) 地域(相模湖町・森林組合など)との関係を強化する… 相模湖町の「湖の星」と言うグループから“花一杯運動”を起こしたいと言う申し入れが丸茂さんにあった。町の人々との交流を強化する。
- 2、森をいかす／FCC事業：
- 1) 「流域材住宅」計画は、予算・資金を募るプロジェクトチームを検討中と報告した。
 - 2) 「森林簿作成」計画をどのように進めるかを検討した。

… 県／水源環境保全施策と税制措置 …

1、会として、どの様に対処するか …月尾先生に相談

神奈川県が年間1100億円以上の規模で20年かけて取り組む「水源の森政策」は、わが国最初にして最大の森林対策であるから余程、慎重に研究して掛からねばならない。神奈川県の水源の森で活動する森林に特化したNPOにとっても重大な取組となる。

そこで、当会の評議員をして頂いている月尾嘉男さん（東大教授を経て前総務省審議官、ITの権威、環境問題にも活動の幅が広い）にお知恵を借りることにした。10月27日、森林仲間から公募して辻田・齊藤・篠田さんの3人と数寄屋橋の月尾事務所を訪問した。

いろんな事を相談した結果、やはり森林の最も基本資料となる「森林簿」の整備が先ず、必要だろうという結論を得て、これに取り組む事にした。神奈川県は、約96,000haの森林があり、国有林や県有林は、そこそこ整備されているが、問題の40,000haの私有林が荒れるに任されているから先ず、ここを調べなければならない。県は、私有林の内、32,000haを公的管理にしたいと言っているが、巻頭（表紙）に述べた状況だから、これは是非とも行はねばならない。

市民団体、一NPOの仕事としては重すぎる課題だが、県と協働すれば可能な事である。我々は“頭から藪に頭を突っ込む事”得意としているから即、行動に移す事にした。具体的には、県森連や県担当部署に相談する。方向を決めて、月尾先生のご指導を仰ぐ。

- 県森連本部：井手部長を訪問した…10月31日：その結果、一緒にやろうと言う事になった。
- 久保寺県森連会長を訪問した …11月11日：以上の事を理解して支援下さる事となった。

2、11月18日、相模原市／県民集会に出席。相模川中流の人々の意見・印象

上流：津久井の県民集会に出席して森林地区の人々の意見を聞いたが、中流の人々の考えを知りたいと相模原市、橋本の杜のホールで開催された県民集会に出席した。

県の幹部十数名の出席に県の並々ならぬ取組を感じたが途中で知事執務を予定より早く終わったから

と電車で松沢知事が駆け付けてくれた。質問に対して知事自身、自ら積極的に回答する姿に知事の誠実な人柄を感じた。相模原市／県民集会では、森林自体の荒廃を心配する声が多く「税制措置」と言う“始めに財源有き”のテーマに疑問が出された。また、税の投入後の「森を生かす」対策が無いことにも疑問が出た。税制制度の専門家らしい者の質問の概念的・抽象的・常識的な発言には、不快感を感じた。学者・有識者に偏した専門部会の人選にも批判が出た。「行政は、一般県民の声をもっと聞け」と言う意見に同意する声が多かったが、県がこのような集会を開き、幹部が揃って出席する事に民主主義の正常な機能を見た。上流津久井会場での印象は、「県行政から取り残されていて不満」であったが中流の人々は、「前向きに森林を考え取り組もう」の様子が見えた。

この県民集会での県民と県行政双方のやり取りに真剣さ、誠実さ、レベルの高さを感じた。こんな対話集会から神奈川の森に希望の陽の差し込む光景が見える思いがした。

- * 閉会後、県担当部署の責任者から「“森林N P Oの緑のダム”と意見の交換をしたい」と申し入れを受けた。以下の日程で実施する。希望者は、参加あれ。
- 12月1日 午前9時45分 県庁新館1Fホール 参加申込要 事務局／石村まで

広報活動：

イ、10月26日、相模原市で…、

当会として、F C C 活動の最初の都市部拠点が相模原市と言う事もあって、市民活動を支援する「市民サポートセンター」での1周年活動報告会に活動記録を出展した。斎藤さん、松尾さん、倉橋さんが協力に駆け付けてくれた。相模原市の沢山の市民団体とも交流が始まって我々の活動は、徐々に都市部にも浸透を始めた。



小川市長も顔を出されて「流域材の流通システム作りの進捗状況」に強い関心を示して下さった。

ロ、11月7日、新宿都庁広場で…、

江戸開府400年記念の祭りとして相模湖町と一緒に出展した。兼松さんたち「間伐活用班」が小枝を利用した人形を並べたり、斎藤さんが恒例の「鋸引き体験」を指導したりで大変な賑わいであった。早稲田町とも協働したが神奈川県だけでなく東京都も我々の活動の対象として繋がり始めた。



お知らせ

1、林業協会による「移動製材車」デモ

小川／相模原市長も活動を励まして下さった。

12月18日(日)、13時から「協力協約C地区」で右の移動製材車の性能実験を実施する。

自然乾燥した材を森の中で製材して搬出しようと言う試みである。神奈川県内の森林関係者を招いて林業協会が行う。同時に森林N P O活動をしている当会を紹介しようと言う事である。そんな機会を与えてくれる林業協会と津久井行政センターに感謝。午前中は、間伐材伐出の実技講習。

2、第4回：緑のダム学校、12月21日（第三日曜日）

本年4月に県／企画部の支援を受けて始めた「緑のダム学校」は、第4回を迎えた。その内容の高さから県の紹介で神奈川T Vで案内の放映する程に成長している。森林仲間もお知り合いを誘って参加して欲しい。問い合わせ・齋藤:03-3996-6609

3、「甲州古道復活プロジェクト、小仏峠～笛子峠の古道踏査」は、いよいよ“最終コーナー”を回った。5月に小仏峠を出発して、1月まで全コースを踏破する。来春2月頃から、各地区ごとに途切れた古道の復活作業に入る事になるだろう。問い合わせ・加藤:042-375-4540。

甲州古道小原宿

小仏峠から底沢に下山した甲州道中は、往時は底沢川を板橋で渡り、大久保沢川を樋谷路橋で渡り本陣東側を鋭角的に曲り小原宿に入りました。

宿並は東側に吉野宿までの道中奉行のお達しの駄賃、人足賃が掲示されていた御高札所が建っていました。宿並はここより2丁半（237m）の宿内に29軒の家が並んでいました。

小原宿は、江戸より15里20間（約60.2km）で道幅は2間（3.6m）程度で本陣、脇本陣と7軒の旅籠があり25人15疋の人馬が常駐された継場でした。小仏峠を越え、小原宿に泊った旅人は、次の与瀬宿を通り越して吉野宿に継ぐ下り片継宿場でした。

宿内は、大久保沢川の樋谷路沢より240間（約430m）の懸樋を架け水を引き、宿内を流し各戸に導水し村民の便に供しました。流末は宿中程よ相模川に流下させました。

小原宿は、明治28年8月8日午前1時に出火、本陣を含む東端4軒を残し全焼した大火が起きました。その後、現在の町並みが再建されました。現在も国道20号線（甲州街道）も町並が東西に走り、本陣を初め和泉屋、清水屋、菊屋、小松屋、伊勢屋、永楽屋、中宿などの屋号の往時旅籠をしていたと思われる家や駕籠屋、湊屋、榎屋など宿場に関わりのある屋号が建ち並ぶ家並は、宿駅を偲ばせる風情を今に止めます。

この小原宿と神奈川県唯一の現存する建造物である本陣を祭る「甲州街道小原宿本陣祭」が今年で10回を数え11月3日に催され、往時の町並み再現と大名行列で賑わいました。本陣内に展示された“甲州古道復活プロジェクト”作成の往時の小仏峠から小原宿までの甲州道中の写真展にも深い関心が寄せられました。

（文責 中里）

- 1) 12月6日(第一土曜)：森林整備
9時30分、弁当持参、参加費
300円、

- 2) 12月21日(第三日曜)：里山交流
9時30分、飯のみ持参
参加費500円、

H P : h t t p : // w w w 0 0 8 . u p p . s o - n e t . j p / k i t a s a m i

支 援 団 体：世界自然保護基金日本委員会、損保ジャパン／環境財団、日本財団

モットー 休まず、無理せず、急がず、楽しく、ボチボチと
そして、沢山のご意見、参加下さい。

名 称／さがみ湖・森つくりの会(NPO法人緑のダム北相模/森林部会)

事務局／〒154-0023 世田谷区若林3-35-9

T & F 03-3411-1636 (石村)

協働団体／セブン－イレブンみどりの基金